

心態詞の使用の背後にある認知的枠組み

— 平叙文に現れる心態詞の分析 —¹

宮 下 博 幸

1. はじめに

心態詞についてはこれまでドイツ語圏では Weydt (1969)、日本では古くは関口 (1954)、さらに岩崎・小野寺 (1969) 以来多くの研究が行われ、それぞれの心態詞について、さまざまな角度から考察や記述が行われてきた。その結果、現在までに心態詞の統語・機能的特徴についてのさまざまな知見が蓄えられている。しかし心態詞の機能に関しては、主に個別の心態詞や、いくつかの類似の機能を持つ心態詞の相違が主に注目され、それぞれの心態詞の機能を、多くの心態詞に当てはまるような統一的な枠組みから説明する試みはそれほど行われてこなかったように見受けられる。とはいえ心態詞が基本的に個人によって獲得され使用されるものであることからすると、その個人の中ではそれぞれの心態詞を位置づける何らかの心的・認知的な枠組みが備わっており、その枠組みの中で状況を手がかりにそれぞれの心態詞の用法を習得し、心態詞を使用していると考えられることもできそうである。本稿で

¹ 本稿は2009年5月31日の日本独文学会春季研究発表会(明治大学)での口頭発表をもとにしたものである。本稿の内容と異なり、筆者は現在では心態詞の感情表出的(emotional-expressiv)機能に注目して分析を行いつつあるが、本稿によりこの発表時点での立場をまとめておきたい。したがって当時の発表原稿から大幅な変更は行っていない。また口頭発表の時点から現在までの間に、心態詞研究では話し手と聞き手の知識の共有基盤(Common ground)に基づく分析が数多くなされるようになってきている(そのうちの初期の研究は例えばPittner 2007)。本稿はそういった研究と形式化の度合いにおいては異なるものの、この流れの研究と関連するものと位置づけることができる。

は、人が心態詞を用いるときに何らかの共通の枠組みを参照していると仮定し、そこから個々の心態詞を考察することを目指したい。しかしすべての心態詞の記述に適用できるような枠組みの構築は容易でないと考えられる。というのも心態詞は平叙文、要請文、疑問文²など、さまざまな文タイプに現れることが知られ、それぞれの文タイプが有する機能により心態詞も影響を被るため、そのような枠組みを見出すことが難しくなることが予想されるからである。本稿では手始めとして平叙文に出現する心態詞のみを対象とし、これらの心態詞の機能を把握できるようなモデルを提案してみたい。平叙文にはさまざまな心態詞が現れるが、本稿では特にこの環境でよく用いられる心態詞である *ja*, *doch*, *eben*, *schon*, *auch* の5つを対象とする。これらの例はそれぞれ次のようなものである。³

- (1) a. Er ist dazu *ja* nicht fähig. (彼はそれ、できないよね)
 b. Diesen Plan haben wir *doch* neulich schon besprochen. (このプランはもう最近話し合ったよ)
 c. Das kostet *eben* viel Zeit. (それは時間がかかるものだ)
 d. Der Zug wird *schon* pünktlich kommen. (列車は時間通り来るよ)
 e. A: Das Essen war ausgezeichnet. (食事はすばらしかったよ)
 B: Es war *auch* die teuerste Speise, die es in diesem Restaurant gibt.
 (このレストランで一番高い料理だったからね)

なお(2)のような、時として平叙文と同じ統語構造で現れる感嘆文は、本稿では扱わないこととする。

- (2) a. Du hast *ja* keinen Bart mehr!
 b. Das Fleisch ist *aber* hart!

² 疑問文における心態詞については König (1977) や Abraham (1995) を参照。

³ 本稿で挙げる例は特に記さない限り、Helbig (1988) からのものである。

2. 心態詞分析のためのモデル

まずドイツ語話者の心態詞の使用の際の背後にあると考えられる心的・認知的なモデルについて考えてみたい。そのようなモデルはどのような要件を満たす必要があるだろうか。モデルには少なくとも以下のような要件が必要だと考えられる。

ドイツ語の心態詞の心的なモデルの要件

- a. 話し手と聞き手の心的状態を考慮するものでなければならない
- b. 認知的に見て妥当でなければならない
- c. 比較的単純でなければならない
- d. 心態詞を必要十分に説明できなければならない

まず a. の点についてであるが、これまでの心態詞の研究で、心態詞は基本的に会話参加者同士の相互作用に大きく関わっていることがわかっている。例えば (3) の例を見てみよう。

(3) A: Mach das Fenster zu! (窓、閉めて)

B: Es ist *doch* viel zu warm im Zimmer. (部屋、暑すぎるじゃないか)

B は A に対して自分の発言内容に注目させ、A の心的な状況を変化させようとしていると解釈できる。したがって心態詞のモデルでは双方の会話参加者、すなわち話し手、聞き手の心的状況を考慮する必要があると思われる。とはいえ実際に心態詞を伴う B のような発話を行う話し手は、あくまで聞き手の心的状況を推測するしかない。話し手は聞き手の心的状態について仮定しうるのみであるから、厳密には心態詞を用いる話し手が仮定する、発話の相手の心的状況を考慮することになる。

次に b. だが、本稿の関心は、心態詞の使用者の心的・認知的な枠組みについて考察することであるため、そのモデルはあくまで認知的に見て整合性

のあるものでなくてはならない。すなわち、人が通常の認知活動において広く行っていることに適合するものでなくてはいけないことになる。

c. に関連して、心態詞はドイツ語を母語とする子供の言語獲得の比較的初期の段階から現れることが知られている。⁴ このことを考え合わせると、心態詞に関わる認知的モデルは、比較的単純なものだと考えられる。

最後に d. の点についてであるが、この成否によって、モデルの有効性が測られることになる。本稿では一つのモデルを提案し、それによって複数の心態詞の機能をどの程度把握することができるかを検証することに重点がおかれることになる。

では以上のような要件を満たすモデルとして、どのようなものが考えられるだろうか。⁵ まず心態詞を統一的に記述するモデルの構成要素として、次のものを仮定したい。⁶

モデルの構成要素

話し手側の要素：

すでに知られている知識

知られていることからの予期

聞き手側の要素：

すでに知られている知識

知られていることからの予期

談話状況の要素：

話し手が話題にする状況（心態詞を含む文が有する命題）

⁴ Ramge (1989), 牛山 (2015) を参照。牛山 (2015: 116ff.) の調査によれば、初期に獲得される新態詞は *denn, doch, ja, mal* であり、個人差もあるが、2 語文が出現するようになった後の 2 歳数か月を過ぎたあたりから使用されるようになるようである。これらは成人の言語使用でも特に頻度が高い心態詞でもある。

⁵ さらに多様な要素を含むモデルも仮定しうるが、ここではその要素をできる限り最小限にすることを目指している。さらなる分析により、これらの要素では十分ではないという結論に至る可能性もあるが、その場合も最小限のモデルに要素を追加する形で記述していくことが可能だと思われる。

⁶ Thurmair (1989) は心態詞の意味素性として複数のものを挙げているが、そのうちの二つに [BEKANNT] [ERWARTET] がある。本稿は認知的に見て重要なこの二つ素性を拡大して適用しようとするものとも捉えられる。

モデルに含まれる要素として仮定するのは、「すでに知られている知識」「知られていることからの予期」「話し手が話題にする状況（心態詞を含む文が有する命題）」の3つである。人は知識を蓄え、それを活用することで現実うまく対応している。また知識を獲得する際には前もって知られていることをもとに様々な予期を行い、談話状況でその予期の事実性が確認されることで、それが知られている知識へと移行することになる。また話し手と聞き手は基本的に同じ認知機構を有しているため、それぞれが同じ要素を持っていると仮定できる。これらの要素はまた記憶のモデルにおける、長期記憶と作業記憶に対応していると考えられることもできる。すなわち作業記憶が働いていると考えられる個々の談話状況によって予期が行われ、その予期が確認されることで、その内容が長期記憶へと移行すると言える。このように考えるなら、以上のモデルの要素は十分に認知的な動機づけがあると言えるだろう。

ではこれらの要素により、心態詞の機能はどのように位置づけられるだろうか。ここでは心態詞の機能を、話し手が話し手・聞き手のこれらの要素を相互に関連づけることと考えてみたい。この要素間の関連づけを行う構成要素としては、少なくとも次の構成要素が考えられる。

モデルの構成要素

関係の構成要素：

XはYと両立可能でない（≠）

XはYと両立可能である（=）

これは簡単に言うならそれぞれの要素について、それぞれが異なるか、同一かという簡単な判断である。このような同一性の判断の能力は、人の発達過程でも早い時期に可能な能力であり、またそれが幼児が心態詞を習得する際の基盤となっていることは十分にありうることだと考える。

本稿では以上の要素を仮定するモデルに基づいて、平叙文に現れるそれぞれの心態詞を考察し、このモデルの妥当性を検討してみたい。なおこのモデ

ルは心態詞の使用の際の基本となる枠組みとして想定されている。しかし実際の使用においては、母語話者はこのような枠組みを手がかりにさまざまな文脈に応用し、その際に語用論的にさまざまなニュアンスが生み出されるものと考えられる。したがって、以下の分析で重要となるのは、心態詞が実際の文脈においてさまざまなニュアンスで使われたとしても、このモデルによって定義される基本的な機能が保たれているかどうかという点にある。

3. 分析

以下では心態詞の *ja*, *doch*, *eben*, *schon*, *auch* を、それぞれ上で述べたモデルの観点から分析してみたい。

3. 1. *ja*

まず心態詞の *ja* について考察する。*ja* はこれまで特に多くの研究が行われてきた心態詞の一つである (Bublitz/von Roncador 1975, Lütten 1979, Lindner 1991, Rinas 2007, Hoffmann 2008 など)。まずこの心態詞を含む用例を見てみよう。

- (7) a. Dieses Ergebnis war *ja* zu erwarten. (これ結果は予想できたね)
b. Dieser Versuch konnte *ja* nicht gelingen. (この試みは成功するはずがなかったね)
c. Monika ist *ja* wieder aus England zurück. (モニカはまたイギリスから戻ったね)

このような *ja* を、Helbig (1988: 165) は次のように定義している。

ja は発話された出来事が話し手と聞き手にとって知られている (=我々がともに知っているように) もしくはさらに自明もしくは一般に妥当することを示し、共通の前提知識に関連づけ、同意 (共通のコミュニケーション

ンの基盤)を前提とし、そしてまた場合によっては同意するように促す。話し手は出来事を既知のものとして前提とするが、その出来事が記憶にあるか(出来事をいわば記憶に呼び戻す)、確かめたがっている。⁷

このような定義をもとに、以上のモデルを用いて *ja* の機能を把握するならば次のようになる。

ja を用いる際の要素の関係:

話し手が話題にする状況 = 話し手にすでに知られている知識 = 聞き手にすでに知られている知識

(7) の例はこのような特徴づけですべて説明できるものと思われる。「結果が予想できたこと」「試みが成功するはずがなかったこと」「モニカがまたイギリスから戻ったこと」という状況は、聞き手にも知られている知識内容として話し手によって話題にされている。

上の Helbig の定義にも含まれているように、*ja* はこれまで話し手と聞き手にとっての既知の事実、話し手と聞き手の意見の一致などを表すと言われてきたが、またこのような特徴づけでは説明できない例があることも知られている。まずこの心態詞が既知の事実を表すという説に対しては (8) のような反例があることを Brausse (1986: 213) が指摘している。

(8) A: Würden Sie bitte weiter durchgehen! (もっと奥の方に入ってください)

⁷ (*ja*) signalisiert den geäußerten Sachverhalt als dem Sprecher und dem Hörer bekannt (= wie wir beide wissen) oder gar als evident bzw. allgemeingültig, bezieht sich auf gemeinsames Vorwissen, setzt Konsens (eine gemeinsame Kommunikationsbasis) voraus und/oder appelliert an Übereinstimmung. Sprecher setzt den Sachverhalt als bekannt voraus, möchte sich jedoch vergewissern, ob er gegenwärtig ist (ruft ihn gleichsam ins Gedächtnis zurück).

B: Nein, ich muß *ja* nächste Station schon aussteigen! (いえ、私は次の
駅でもう下りないといけないもので)

これは路面電車内での会話である。ここで A と B は初対面であり、B が次の
駅で降りなければいけないという発話の内容が A に既知であるとは考えら
れない。それにも関わらず B は *ja* を伴う発話を行っている。この例は *ja* が
聞き手と話し手にとって既知の事実を表すとすると確かに問題であり、上で
挙げた本稿の特徴づけでも、次の駅で降りるという事態は聞き手にすでに知
られている知識ではないため、うまくいかないことになる。このような例を
説明するため、上の特徴づけを次のように変更してみたい。

ja を用いる際の要素の関係：

話し手が話題にする状況 = 話し手にすでに知られている知識 = 聞き手
にすでに知られている知識または聞き手に知られていることからの予期

次の駅で降りなければならないということは、聞き手には知られていない内
容ではあるが、路面電車に乗っているという状況からすると、聞き手には十
分に予期可能な内容である。本稿の枠組みの予期の要素を付加して、話し手
にすでに知られている知識がまた状況からして聞き手にとって予期可能な内
容であり、またその内容を話題にするときに *ja* が用いられるとすれば、上
の例は説明可能となる。本稿では *ja* の使用条件をこのように拡大して把握
したい。

さらに Rinas (2007) はこれまでの *ja* の研究で説明できない例として (9)
を挙げている。この発話は、この話し手が1回目の結婚で二人の子供をもう
けたが10年前離婚し、その後再婚してまた二人の子供をもうけた、という
内容の後につづくものである。

(9) Die Großen sind *ja* schon 18 und 20, die beiden Kleinen drei und fünf.

(大きいほうはもう 18 歳と 20 歳、小さいほう二人は 3 歳と 5 歳です)

ここで「大きいほうはもう 18 歳と 20 歳」という内容は、聞き手に知られている内容ではなく、また話し手と聞き手の意見が一致している内容でもない。Rinas はこの場合の *ja* を「知識の優位の表示」の *ja* としているが、⁸ 上で挙げた *ja* の特徴づけに基づくなら、(8) の例と同様の説明が可能である。1 回目の結婚で二人の子供をもうけ、10 年前に離婚したことからすると、こどもが 18 歳か 20 歳くらいになるということは、聞き手にも十分予期できることである。本稿の立場では、文脈からしてこれが聞き手に十分予期できる内容であるがために、*ja* の使用が可能になっていると解釈できる。上の特徴づけにより、このように (8) と (9) の例が統一的に説明可能であることがわかる。

3. 2. *doch*

次に *doch* を見てみたい。*doch* に関してはこれまで多くの研究がある (関口 1954, Rath 1975, van Valin 1975, Lütten 1979, Graefen 2000, Pittner 2007 など)。Helbig (1988: 111f.) では、平叙文に現れる *doch* が *doch*₁ と *doch*₂ に分けられている。以下がそれぞれの *doch* の例である。

*doch*₁:

- (10) a. Er ist *doch* ein sehr erfahrener Chirurg. (彼はとても経験豊富な外科医だよ)
b. Du weißt *doch*, dass ich ins Ausland fahren muss. (私が外国に行かなければいけないことは君も知っているじゃないか)

⁸ このようなバリエーションを想定することは可能であるが、このようにしていくと *ja* の機能をどの程度仮定すべきなのかという問題や、それぞれのバリエーションがどのようにつながるのかという問題が生じる。ここでも「知識の優位」と「既知の事実・意見の一致」という機能がどのように関わるのかという問題が出てくる。これは一般に心態詞を多義的にとらえようとする際に生じてくる問題である。

*doch*₂:

(11) a. A: Mach das Fenster zu! (窓、閉めて)

B: Es ist *doch* viel zu warm im Zimmer. (部屋、暑すぎるじゃないか)

b. A: Gib mir mein Buch zurück! (私の本、返して)

B: Ich habe es dir *doch* gestern schon zurückgegeben. (昨日もう君に返したじゃないか)

またそれぞれの定義は次のようになっている (Helbig 1988: 111f.)。

*doch*₁:

doch は態度を確認し、既知であるが過去のことであり、忘れられていること (それは話し手によって聞き手の意識に喚起される) を思い出させることにより、強調を表現する。*doch* により、共通の知識の基盤に注意が向けられ、話し手は自分の態度を聞き手へと移し変え、聞き手を言外に同意するように要請する (その際軽い反論が表される)。*doch*₁ は意見の一致を前提とし、すでにある意見の一致を明示的に取り上げ、対話において意見の一致を創り上げる。⁹

*doch*₂:

doch は反応として先行する言語行為 (先行発話) を指示し、それと *doch*₂ によりコメントされる発言の間に、軽い異議を作り出し、会話を連結する一方で、先行発話を行った話し手が望まない反応を他方で含む。と

⁹ (*doch*) bestätigt eine Einstellung, drückt eine Verstärkung aus durch Erinnerung an Bekanntes, aber Vergangenes und in Vergessenheit Geratenes, das auf diese Weise vom Sprecher in das Bewußtsein des Hörers zurückgerufen werden soll. Mit *doch* wird an gemeinsame Wissensbasis appelliert, Sprecher will seine Einstellung auf Hörer übertragen und ihn illokutiv zur Zustimmung auffordern (dabei einen leichten Widerspruch ausräumen). *doch*₁ setzt Konsens voraus, thematisiert den schon bestehenden Konsens ausdrücklich und wirkt im Dialog konsens-konstitutiv.

いうのも先行発話が批判されるもしくは却下されるためである。発話内行為的な意味としては、(例えば、先行発話で表出された要請をかなえる前提の)拒否や、非難、非難のお返しもしくは正当化がある(=aber)。テキスト連結や逆行連結が行われる際には、よく理由付けの機能が見られる。¹⁰

また Helbig (1988: 112) は両者の相違として *doch*₂ には否定的な非難の要素があるのに対し、*doch*₁ にはそれが無いことを挙げている。以上の定義をもとにすると、我々のモデルでは次のように表示できると思われる。

doch を用いる際の要素の関係¹¹ :

話し手が話題にする状況 = 話し手にすでに知られている知識 ≠ 聞き手に知られていることからの予期または聞き手にすでに知られている知識

doch を含む文では、話し手にすでに知られている知識が話題にされる。*doch*₁ の例とされる (10a) では、*doch* を含む文で表されている「彼が経験豊

¹⁰ (*doch*) bezieht sich reaktiv auf vorangegangenen Sprechakt (Vorgängerzug) und stellt zwischen ihm und der durch *doch*₂ kommentierten Aussage einen leichten Widerspruch her; wirkt einerseits konversationskonkretiv, enthält andererseits eine vom vorangehenden Sprecher nicht gewünschte Reaktion, da Vorgängerzug kritisiert oder zurückgewiesen wird. Illokutiv handelt es sich um eine Zurückweisung (Z. B. der Voraussetzung für die Erfüllung einer im Vorgängerzug ausgesprochenen Aufforderung), um einen Vorwurf, einen Gegenvorwurf bzw. eine Rechtfertigung (= *aber*). Mit Textverknüpfung und Rückwärtskonkretion ist oft begründende Funktion verbunden.

¹¹ この特徴づけのうち、特に話し手が話題にする状況が聞き手に関わるものの場合、話し手と聞き手が入れ替わり、「話し手が話題にする状況 = 聞き手にすでに知られている知識 ≠ 話し手に知られていることからの予期」となることもあるようである。例えば Sie sind *doch* Herr Meyer. という発話では、相手がマイヤー氏であるという内容は、当然ながら聞き手に知られている知識である。それに対し、話し手はこの内容を予期していない。このように話し手と聞き手が入れ替わる場合にも、*doch* が用いられる。しかしこのような場合でも、*doch* の全体の特徴づけは不変だと考えられる。

富な外科医である」ことは話し手の知識内にある内容である。しかしここで聞き手はこの内容を必ずしも予期していないと話し手は想定しており、この場合に *doch* を用いて文の内容を聞き手に喚起していると言える。(10b) では話し手は自分が外国に行かなければいけないことを聞き手が知っていることと記憶しているが、聞き手は知っていることを予期していない、あるいは思い当たらない様子に見えるため、*doch* を用いた文で、相手がすでに知っている事実を目を向けさせている。*doch*₂ の例とされる (11a) も同様に、「部屋が暑すぎる」という内容は話し手の知識にあるものである。しかし窓を閉めるという聞き手の行動からすると、聞き手には部屋が暑すぎるということが聞き手の知識内になく見受けられる。そこで *doch* を用いて文内容に注意を向けさせている。(11b) も同様に「私の本、返して」という相手の発話から、「私が昨日もう本を返した」という知識が相手にないと話し手に想定される場合である。ここでも同じく *doch* によって文内容に注意が促される。ここで *doch*₁ との違いに注意したい。これらの例では話し手は文内容が聞き手の知識にないと判断しているものと考えられる。これに対し *doch*₁ の場合は、聞き手の知識にないと判断ではなく、聞き手の予期になさそうだという話し手の判断に関わると考えられる。この違いはまた、Helbig が指摘しているように、*doch*₂ に否定的な非難の要素が含まれる背景となつていると考えられる。すなわち相手の有する知識が自分が事実だと信じている知識と異なっていることを指摘することは、相手が文脈から予期できそうなことと異なっていることを指摘するのに比べ、多分に非難の度合いが強まると考えられるためである。したがって本稿の *doch* の特徴づけに従うなら、以上の Helbig が挙げる二つの *doch* は聞き手の予期と知識のいずれかが問題になっているかによって生じてくるものと考えられる。このように考えるなら、Helbig のように二つの *doch* を区別する必要はないことになる。二つの *doch* を統一的な観点から関連づけることができるという点でも、本稿の特徴づけはうまく機能しているように思われる。

3. 3. *eben*

ドイツ語においては *eben* とほぼ同じような意味を表す *halt* という心態詞があり、それぞれ北ドイツと南ドイツのバリエーションとされることもあるが、そのような地域的な限定性はすでになくなりつつあるともされる (Helbig 1988: 158)。また両者は親近性などの度合いにおいて差異があり (Hentschel 1982)、また機能上の範囲も異なることも指摘されてきた (Hartog/Rüttenauer 1982)。しかし両者とも基本的な意味は大きく変わらないと考え、以下では *eben* のみを扱うことにする。まずこの心態詞の用例を見てみたい。

- (12) a. Die Prüfung ist *eben* zu schwer. (その試験は難しすぎるんだ)
b. Das kostet *eben* viel Zeit. (それは多くの時間がかかるものだ)
c. Die Kinder sind *eben* verwöhnt. (その子供たちは甘やかされているのだ)

eben は Helbig (1988: 120) によれば、次のように定義される。

eben は発言を絶対的なもの、自明で一般に妥当するものとし、また他の理由づけを広く無効とし、出来事の内的な必然性、とくにその変更不可能性を暗示し、話し手がその出来事を変更できないことを示す。出来事の事実性はもはや議論の余地がない理由づけとして提示される。追加の理由の問いかけはブロックされる。終止符を打とうとするため、しばしば会話を打ち切るものとなる。¹²

¹² (*eben*) macht eine Aussage kategorisch, stellt sie als evident und allgemeingültig hin, immunisiert sie weitgehend gegen andere Begründungen und suggeriert die innere Notwendigkeit des Sachverhalts und vor allem seine Unabänderlichkeit, deutet an, daß der Sprecher den Sachverhalt nicht verändern kann. Die Faktizität des Sachverhalts wird als nicht weiter diskutierbare Begründung ausgegeben. Fragen nach zusätzlichen Gründen werden blockiert. Es soll Schlußstrich

この定義を考慮しつつ本稿のモデルに当てはめてみたい。(12a)をもとに、モデルの要素間の関係を考えてみよう。ここではモデルの要素の中で、特に話し手に知られていることからの予期が関わっていると考えることができようである。この例は「話し手に知られていることからすると、その試験は難しすぎる事が予期される」と解釈可能である。これは次のようにまとめることができる。

eben を用いる際の要素の関係¹³：

話し手が話題にする状況 = 話し手に知られていることからの予期

eben はこのように心態詞を含む発話で表される状況と、話し手に知られていることからの予期が一致しているということを表すものと理解される。すなわち知られている限りでその状況が通用すると予期されることを示すと考えられる。*eben* は上の Helbig の定義のようにしばしば話し手はその出来事を変更できないことを表すとされるが、「話し手に知られていることからするとその状況が予期される」という解釈は、その状況は変更不可能であるという含意を生み出しうると考えられる。例えば「話し手に知られていることからすると雨が降ると予期される」という解釈からは、雨が降ることは不可避であり、変更不可能なものという含意を導き出しうる。この点で本稿のモデルによる特徴づけは *eben* に通常見られる特徴づけともつながっていることになる。

Hartog/Rüttenauer (1982: 73) は、Helbig の定義にあった変更不可能性の

gezogen werden, deshalb oft redeabbrechend.

¹³ ここでは聞き手の要素の関連づけが行われていないが、これは Helbig の定義にもはや議論の余地がない理由づけが行われるとされることから、話し手内で完結した形で文内容が提示されると解釈したことによる。この場合でも文内容が聞き手が予期できるものであったり、聞き手の知識にあるものである可能性もあるわけだが、本稿ではこれらの要素と関連づけをあえて行わないところに、*eben* の機能的特徴があると考える。

機能とは異なる *eben* を挙げている。そのうちの 하나가 (13) のもので、彼らはこれを「虚勢の *eben* (Bluff-*eben*)」と呼んでいる。

- (13) Man hat neben möglichen Welten *eben* auch Ereignisse. (可能な世界と並んで、出来事もまた生じるものだ)

彼らはこの *eben* を ich beharre auf dieser Meinung (私はこの意見に固執する) とパラフレーズしているが、たしかにこれは変更不可能という特徴づけでは説明できないと思われる。しかし「話し手に知られていることからすると文内容が予期される」とする本稿の特徴づけに従うなら、これは一種の主張として解釈されることが可能だと考えられる。さらにそこで行われるのは予期の伝達であるため、「虚勢」といったニュアンスが加わるものと考えられる。また Hartog/Rüttenauer (1982: 75) は変更不可能性とは異なる機能の *eben* の例としてさらに (14) の例を挙げ、これを「埋め草の *eben* (Füllsel-*eben*)」としている。

- (14) ... und bevor das neue Schuljahr beginnt, und da Katherine in den Kindergarten, die wird eingeschult und äh, die Kinder kommen *eben* in neue Klassengemeinschaften und ...

ここでは *eben* は特に意味はなく、「そのようなものである (das ist so)」という埋め草として機能しているとされる。これも変更不可能性という特徴づけでは捉えられない例であると言える。しかしこの例も本稿の特徴づけと両立可能であるように見える。本稿の特徴づけから導き出されるような、「子供が新しいクラス仲間と一緒にいることが、話し手が知られていることから予期される」という解釈は、特別な意味を持たず、単に「子供が新しいクラス仲間と一緒にいる」ことへの言及にも容易に広がっていくものと考えられる。このように *eben* の機能としてしばしば指摘される変更不可能性を表し

ていると解釈ができない例に関しても、本稿の特徴づけは有効だと考えられる。

3.4. *schon*

平叙文に現れる心態詞の *schon* には、(15) のような常にアクセントの置かれぬ *schon* と、アクセントが置かれうる *schon* がある。Helbig (1988) は前者を *schon*₁、後者を *schon*₂ として区別しているが、Bublitz (1978: 90f.) は後者を話法詞としている。心態詞は通常アクセントが置かれぬとされ、後者はいずれにせよ典型的な心態詞ではないと思われるので、ここでは前者のアクセントが置かれぬ *schon* のみを扱うことにする。この *schon* の例は以下のようなものである。

- (15) a. Es wird *schon* nicht regnen. (雨は降らないから大丈夫さ)
b. Sie bringt die Angelegenheit *schon* in Ordnung. (彼女がその件を
きっと片付けてくれるさ)
c. Unsere Schüler schaffen das *schon*. (私たちの生徒はそれをやれるさ)

(15) の用例を見ると分かるように、まずこの *schon* は他の心態詞と異なり、いつも未来の意をもつ平叙文とのみ共起する (Helbig 1988: 201)。Helbig (1988: 201) はこの *schon* を次のように定義している。

schon は妥当な理由づけを示し、発言された推測が正しく、その出来事が生じるであろうという、話し手の確信の表現に使われ、さらに確認を超えて希望や安心や慰めや警告などを表す。¹⁴

¹⁴ (*schon*) signalisiert eine plausible Begründung, dient dem Ausdruck der Zuversicht des Sprechers, daß die geäußerte Vermutung richtig ist und der Sachverhalt eintreten wird, drückt auf diese Weise über die Feststellung hinaus Hoffnung, Beruhigung, Trost, Warnung u. a. aus.

この定義に基づいて *schon* の機能が本稿のモデルによりどのように表示可能か、(15a) をもとに考えてみたい。まずここで *schon* が現れるのは「雨が降らないだろう」という、話し手が関心をもつ未来の状況においてである。そしてこの内容は、話し手に知られていることからの予期と一致するものである。これによって Helbig の定義における「話し手の確信」が表されると言える。さらに (15a) は、Helbig の定義では、聞き手に希望や安心や慰めや警告を表すとされる。このような効果が生まれるのは、聞き手側の要素である、聞き手に知られていることからの予期が関わるためであると考えられる。(15a) では雨が降るのではないかという聞き手の予期ということになる。この聞き手に知られていることからの予期が、話し手に知られていることからの予期と一致していないため、話し手は *schon* を含む文で話し手の予期を伝達することで、通常ネガティブなその聞き手の予期を打ち消す。これによって希望や安心等のニュアンスが生じてくるのだと考えられる。これを図式的にまとめると次のようになる。

schon を用いる際の要素の関係：

話し手が話題にする未来の状況 = 話し手に知られていることからの予期 ≠
聞き手に知られていることからの予期

この特徴づけによれば、聞き手の予期は話し手の予期と一致していないが、話し手の予期は未来の状況と一致していることを表すのが *schon* の基本的な機能ということになる。(15) の他の例もすべてこのような機能の表れとして把握できる。

Ormelius-Sandblom (1997: 114) は *schon* に (16) のような意味を想定している。

(16) [~FAKT ~p] = it is not a fact that not p

そして「*schon* が断言文で現れるときには、その意味により、その断言を弱める ... (When *schon* occurs in an assertion it weakens the assertion because of its meaning ...)」としている。*schon* の意味をこのように把握することは、しかし問題があるように思われる。Ormelius-Sandblom (1997: 115f.) は否定を含む (17) の例を挙げている。

(17) A: Maria reist morgen nach Frankreich. (マリアは明日フランスに旅行にいくって)

B: Ach, sie wird *schon* nicht reisen. (ああ、彼女はきっといかないさ)

Ormelius-Sandblom はここで命題 p は否定を含む *sie wird nicht reisen* であり、この否定は (16) の意味のうちの $\text{not } p$ と打ち消しあうため、ここで表される意味は $\text{not FAKT } p$ すなわち「 p は事実ではない」だとしている。この例に即して言うなら、「彼女が旅行するのは事実でない」となる。しかし B で表されているのは、「彼女が旅行にいかない」という予測であり、事実であるかどうかは問題になっていないように感じられる。このように実際に現れる意味がうまく捉えられないのであれば、Ormelius-Sandblom の (16) のような特徴づけは問題があることになる。一方、我々のモデルの特徴づけに従うなら、(17) は彼女が旅行しないという話し手の予期の通りに運ぶであろうことを表すものとして捉えられる。

また Ormelius-Sandblom が指摘にあった *schon* が用いられることで断定が弱められるという点は、我々のモデルでも説明がつくものである。すなわち未来の状況と一致するのは、あくまで話し手の予期であり、断定よりは弱いものとなる。このように、本稿の特徴づけに基づくことにより、言語事実的に見て、より妥当な説明ができると考えられる。

3. 5. *auch*

最後に *auch* を我々のモデルの観点から見てみたい。¹⁵ 平叙文に現れる心懸詞としての *auch* の用例は (18) のようなものである。

- (18) a. A: Er ist zum Direktor ernannt worden. (彼は社長に任命されたよ)
B: Er hat *auch* die meisten Erfahrungen auf unserem Gebiet. (彼は私たちの領域で一番経験があるんだから)
- b. A: Peter sieht sehr schlecht aus. (ペーターは具合が悪そうに見えるね)
B: Er ist *auch* sehr lange krank gewesen. (彼は長いこと病気だったんだから)

この心懸詞の Helbig (1988: 88) による定義は次のようになっている。

テキスト連結的、(テキストもしくは状況を) さかのぼって指示する。先行する主張を暗に確認し肯定する (= そう、…は本当にそうだ)。しかし新しい主張は前の文から引き出される語用論的含意に異議を挟み、この含意に対して直接もしくは間接の反論を示し、先行する発言から驚くべき部分や疑義のある部分を取り除くことで、相互行為的に (行為のコンテキストにおいて) 説明的な性格を持つ。¹⁶

¹⁵ *auch* についてはまた Dittmar (1980) や Duplâtre (2006) を参照。

¹⁶ Textverknüpfend, rückverweisend (auf Text oder Situation); Vorgängerbehauptung wird implizit bestätigt und bejaht (= ja; es ist wirklich so, daß ...); die neue Behauptung bestreitet jedoch pragmatische Implikationen, die sich aus dem vorangegangenen Satz ableiten lassen, *auch* signalisiert damit einen (direkten oder indirekten) Widerspruch zu diesen Implikationen, hat interaktionell (im Handlungskontext) einen erklärenden Charakter, indem der Vorgängeraussage das Erstaunliche und Fragwürdige genommen wird (*das ist auch nicht erstaunlich, denn ...; das war auch zu erwarten*).

以上の定義を参考にしつつ、(18a)の例をもとに、これを我々のモデルに置き換えてみたい。まず上の定義には「先行する主張を暗に確認し肯定する」とある。先行する主張は(18a)では「彼が社長に任命された」というAの主張である。この主張とBすなわち心態詞を伴う発話の話し手が話題にする「彼が私たちの領域で一番経験がある」という状況との関連を考えてみよう。「彼が社長に任命された」というAの発言からすると、BはAが「彼が私たちの領域で一番経験がある」ということが予期できると想定できる。したがってこのAの予期と、Bの「彼が私たちの領域で一番経験がある」という知識は両立可能であり、*auch*を含む文はこの点で先行する主張を肯定していると考えられる。しかしBは「彼が私たちの領域で一番経験がある」という知識をAが持っているとは想定しておらず、これはAの知識に一致しない。そのためこの知識を伝達することで、聞き手の予期を新たな知識にすることを促している。これはまた説明的な性格を持つことにつながる。これを図式的にまとめると次のようになる。

auch を用いる際の要素の関係：

話し手が話題にする状況 = 話し手にすでに知られている知識 = 聞き手にすでに知られていることからの予期 ≠ 聞き手にすでに知られている知識

このモデルによれば、*auch* は話し手の知識にあり、聞き手にも予期できそうではあるものの、まだ聞き手の知識となっていない状況を提示する際に用いられるものと見なすことができる。このような関係は(18b)にも同様に見られる。以上のように *auch* に関しても、我々のモデルでその基本的機能を把握することができると考えられる。

4. おわりに

以上で明らかとなったと思われるのは、本稿で提案したモデルにより、平叙文にあらわれる複数の心態詞の基本的な機能が、同じ枠組みのもので把握

可能となるということである。このモデルは心態詞の派生的なさまざまなニュアンスを説明するものではなく、それぞれの心態詞のより詳細な使用条件を規定するためにはさらにさまざまな点で精緻化する必要があると思われるものの、その基本機能を把握するための有効なモデルとなりうると考えられる。またドイツ語を母語とする子供が言語獲得において、このモデルのような単純な構成要素を手がかりに心態詞を獲得していることは十分考えられる。これまで心態詞は複雑な意味を表すものと捉えられがちだったが、このモデルを参照することで、心態詞それぞれの機能がはっきりと浮き彫りになり、それは基本的な部分において、それほど複雑なものではないことが示されるのではないかと考えられる。このようなモデルに立脚すると、心態詞も若干違ったものとして把握できるであろう。Weydt(1969: 22) の心態詞の古典的な定義は次のようなものであった。

心態詞は発言に対する話者の態度（態度表明）を表し、聞き手がその発言の内容をどう位置づけるべきかを、聞き手に伝える役割を果たす。¹⁷

これに対し本稿のモデルの立場からすると、次のように定義できると思われる。

心態詞は話し手が話題にする状況（心態詞を含む文の命題）と、話し手・聞き手に心的に存在する予期や知識との両立可能性（= または ≠）を示す役割を果たす。

本稿では平叙文に現れる心態詞に基づいて考察してきた。ここで見たモデルが果たして他の文タイプにも応用可能なのか、また上で試みた心態詞の定義

¹⁷ Die Abtönungspartikeln dienen dazu, die Haltung (Stellungnahme) des Sprechers zum Gesagten auszudrücken und dem Hörer mitzuteilen, wie er den Inhalt des Gesagten einzuordnen habe.

が他の文タイプに現れる心態詞も考慮したときにも有効なのかなど、今後考察すべき多くの課題があるが、本稿はひとまずここで筆をおきたい。

参考文献

- Abraham, W. (1995): Modalpartikeln in Fragesätzen. Restriktionen und Funktionen: die Nullhypothesen. In: Schecker, Michael (Hrsg.): *Fragen und Fragesätze im Deutschen*. Tübingen: Stauffenburg, 95-109.
- Bublitz, Wolfram/von Roncador, Manfred (1975): Über die deutsche Partikel *ja*. In: Bátori, István/von Roncador, Manfred/Bublitz, Wolfram/Abraham, Werner/Levin, Jurij L./Pusch, Luise F. (Hrsg.): *Syntaktische und semantische Studien zur Koordination*. Tübingen: Narr, 137-190.
- Bublitz, Wolfram (1977): Deutsch *aber* als Konjunktion und als Modalpartikel. In: Sprengel, Konrad/Bald, Wolf-Dietrich/Viethen, Heinz Werner (Hrsg.) (1977): *Semantik und Pragmatik. Akten des 11. Linguistischen Kolloquiums, Aachen 1976*. Tübingen: Niemeyer. 199-210.
- Bublitz, Wolfram (1978): *Ausdrucksweisen der Sprechereinstellung im Deutschen und Englischen: Untersuchung zur Syntax, Semantik und Pragmatik der deutschen Modalpartikeln und Vergewisserungsfragen und ihrer englischen Entsprechungen*. Tübingen: Niemeyer.
- Dittmann, Jürgen (1980): *Auch* und *denn* als Abtönungspartikeln. Zugleich ein wissenschaftsgeschichtlicher Beitrag. In: *Zeitschrift für germanistische Linguistik* 8, 51-73.
- Duplâtre, Olivier (2006): *Auch* - eine semantische Untersuchung. In: *Sprachwissenschaft* 31/1, 73-111.
- Gornik-Gerhardt, Hildegard (1981): Zu den Funktionen der Modalpartikel *schon* und einiger ihrer Substitutentia. Tübingen: Narr.
- Graefen, Gabriele (2000): Ein Beitrag zur Partikelanalyse - Beispiel: *doch*. In: *Linguistik online* 6 2/00. http://www.linguistik-online.com/2_00/graefen.html.
- Hartog, Jennifer/Rüttenauer, Martin (1982): Über die Partikel *eben*. In: *Deutsche Sprache* 10, 69-82.
- Helbig, Gerhard (1988): *Lexikon deutscher Partikeln*. Verlag Enzyklopädie: Leipzig.
- Hentschel, Elke (1982): *Halt* und *eben*. In: Detering, Klaus/Schmidt-Radefeldt, Jürgen/Sucharowski, Wolfgang (Hrsg.) (1982): *Sprache erkennen und verstehen. Akten des 16. Linguistischen Kolloquiums Kiel 1981*. Tübingen: Niemeyer, 231-

241.

- Hoffmann, Rudiger (2008): Über *ja*. In: *Deutsche Sprache* 36, 193–219.
- 岩崎英二郎・小野寺和夫編 (1969): 『ドイツ語不変化詞辞典』白水社.
- König, Ekkehard (1977): Modalpartikeln in Fragesätzen. In: Weydt, Harald (Hrsg.): *Aspekte der Modalpartikeln*. Tübingen: Niemeyer, 115–130.
- Lindner, Katrin (1991): *Wir sind ja doch alte Bekannte*. The use of German *ja* and *doch* as modal particles. In: Abraham, Werner (Hrsg.): *Discourse particles. Descriptive and theoretical investigations on the logical, syntactic and pragmatic properties of discourse particles in German*. Amsterdam: Benjamins, 163–201.
- Lütten, Jutta (1979): Die Rolle der Partikeln *doch*, *eben* und *ja* als Konsensus-Konstitutiva in gesprochener Sprache. In: Weydt, Harald (Hrsg.) (1979): *Die Partikeln der deutschen Sprache*. Berlin, New York: de Gruyter, 30–38.
- Ormelius, Elisabet (1993): Die Modalpartikel *schon*. In: Rosengren, Inger (Hrsg.) (1993): *Satz und Illokution. Bd. 2*. Tübingen: Niemeyer, 151–191.
- Ormelius-Sandblom, Elisabet (1997): The modal particle *schon*: Its syntax, semantics, and pragmatics. In: Swan, Toril/Westvik, Olaf Jansen (Hrsg.) (1997): *Modality in Germanic languages: Historical and comparative perspectives*. Berlin, New York: de Gruyter, 75–133.
- Pittner, Karin (2007): Common ground in interaction: the functions of medial *doch*. In: Fetzer, Anita/Fischer, Kerstin (Hrsg.): *Lexical Markers of Common Grounds*. Amsterdam usw.: Elsevier, 67–87.
- Ramge, Hans (1987): Quantitative Beobachtungen zur Ontogenese der Modalverben im Deutschen. In: Oksaar, Els (Hrsg.): *Soziokulturelle Perspektiven von Mehrsprachigkeit und Spracherwerb*. Tübingen: Narr, 127–157.
- Rath, Rainer (1975): *Doch* – eine Studie zur Syntax und zur kommunikativen Funktion einer Partikel. In: *Deutsche Sprache* 3, 222–242.
- Rinas, Karsten (2007): Bekanntheit? Begründung? Einigkeit? Zur semantischen Analyse der Abtönungspartikel *ja*. In: *Deutsch als Fremdsprache* 44, 205–211.
- 関口存男 (1954): 「Doch とは何ぞや？」 In: 関口存男：『ドイツ語学講話』三修社, 201–206.
- Thurmair, Maria (1989): *Modalpartikeln und ihre Kombinationen*. Tübingen: Niemeyer.
- 牛山さおり (2015): 『ドイツ語を母語とする幼児の心態詞獲得・習得に関する研究－Rigol コーパスに基づく心態詞 *doch* と *ja* の分析－』学習院大学大学院人文科学研究科ドイツ文学専攻博士論文
- Weydt, Harald (1969): *Abtönungspartikel: die deutschen Modalwörter und ihre französischen Entsprechungen*. Bad Homburg: Gehlen.
- Weydt, Harald (Hrsg.) (1977): *Aspekte der Modalpartikeln. Studien zur deutschen*

Abtönung. Tübingen: Niemeyer.

van Valin Jr., Robert D. (1975): German *doch*: the basic phenomena. In: Grossman, Robin E./San, L. James/Vance, Timothy J. (Hrsg.) (1975): *Papers from the 11th regional meeting, Chicago Linguistic Society, April 18-20, 1975*. Chicago: Chicago Linguistic Society, 625-637.